筑波大学審査学位論文（博士）

論文題目：

学校音楽教育における「カリキュラム経験」の構成過程に関する実証的研究

人間総合科学研究科学校教育学専攻

氏名：笹野恵理子

１．問題の設定と本研究の目的

学校音楽カリキュラムは、「当事者」である学校成員にどう経験されるのか。これが本研究を支える最も根本的な問いである。「文書化され」「計画された」カリキュラムが実施されるとき、カリキュラムに埋め込まれた教科学習の教育意図や内容を教師や児童生徒はどのように意味づけて経験するのか。本研究は、実際に教室で「経験」を編む教師と児童生徒らの学校音楽カリキュラムへの意味付与を「学校音楽のカリキュラム経験」と呼んで対象化し、その「学校音楽のカリキュラム経験」と経験を構成する過程のメカニズムを解明しようとするものである。

この問題を設定するにあたって、本研究が最初に着目したのは、「潜在的カリキュラム」（hidden curriculum）研究である。潜在的カリキュラム研究は、「教育意図と学習経験の乖離」を指摘することで、学習者の「経験」への着目を促し、カリキュラムの「流動性」と「動態性」を明らかにした。すなわち、カリキュラムの実質は、教室で実際に編まれる当事者の「経験」にアプローチすることによってはじめて明らかにされる。

教科教育学研究においてそのカリキュラム論は、伝統的に、当該教科における教科内容編成方法論に主要な力点がおかれてきたといってよい。それら従来の意図的な「教育計画としてのカリキュラム」研究は、「教えられた内容」と「学ばれる内容」をリニアな系で結んだ単一的、単線的な研究図式を採用したものであった。そこでは、カリキュラムはスタティックなものとして把握されがちで、潜在的カリキュラム研究が指摘したカリキュラムの「経験」の層や動態的で流動的な側面については十分な関心が払われてこなかった。

以上の問題意識にたって本研究では、「学校音楽のカリキュラム経験」の構成過程を解明するという課題に挑戦した。本研究は、教科教育学研究ないしは学校音楽教育研究における以上のような研究視角の不十分さを自覚し、従来のともすると単一的、単線的カリキュラム観とその研究図式を問い直し、学校音楽カリキュラムに関する独自の実証的理論を構築しようと試みたものである。

２. 本論文の具体的概要

序章において、以上の問題設定とともに、本論文において使用する用語を整理したうえ、日本の学校音楽教育におけるカリキュラム研究の先行研究の検討を通して、本研究を位置づけ、本論文の具体的課題を明らかにした。

はじめに、本研究のキーワードとなる「カリキュラム経験」という用語について、それ

は「経験されたカリキュラム」に位置づく「当事者」の「生きられた（lived）経験」であり、主観や解釈を経た「意味づけられた経験」であること、それゆえ時間構造をもつことを論じた。次に、日本の学校音楽教育におけるカリキュラム研究の先行研究の検討を行い、従来の研究が、教科内容編成上の課題にたって、「教育計画」としてのカリキュラムのレベルで、「仮」のモデルを蓄積してきたけれども、実際に教室で教師と児童生徒によって編まれる「経験」については看過されてきたことを指摘した。それに対して本研究は、当事者の「経験」の視点を分析の射程に取り込むことで、学校音楽カリキュラムと教師ならびに児童生徒の関係性を学校音楽の全体的な教育過程の動態から問い直そうとするものであることを示した。すなわち、学校音楽カリキュラムをコンテクストから独立可能な個体実体的な客体として扱う見方を留保し、学校音楽カリキュラムの意味や効果は、カリキュラムとそれをとりまく人々の関係の中で生まれてくるものとして考えた。

以上を踏まえて本論文では、次の４点の具体的課題を設定した。

（１）「学校音楽のカリキュラム経験」の構成過程を実証的に解明する研究枠組みの構想

（２）教師の「学校音楽のカリキュラム経験」とその経験の構成過程のメカニズムの解明

（３）児童生徒の「学校音楽のカリキュラム経験」とその経験の構成過程のメカニズムの解明

（４）学校音楽カリキュラムの実証的理論の構想

第１章では、上の（１）の課題を検討し、本研究を着想するにいたった潜在的カリキュラム研究の理論的検討を通して、本研究の仮説モデルを構想した。本研究では、「カリキュラム経験」研究の先駆的研究と位置付けられる田中統治（1996）の「社会的統制」に基づく理論モデルを参照し、当事者の「カリキュラム経験」を「カリキュラムの組織過程」「カリキュラムによる適応過程」の２つの過程から検討する仮説的枠組みを構想した。

「第１部」（第２章・第３章・第４章）では、序章で設定した（２）の課題を追究した。すなわち、第１章の枠組みを用いて、「カリキュラムの組織過程」から、教師の「学校音楽のカリキュラム経験」について検討した。

第２章では、質問紙調査の統計的分析から、教師のカリキュラムへの意味付与を明らかにした。本研究の分析から、教師の「カリキュラム経験」の内容構造として、「音楽協同」「音楽自発性」「音楽技能」「音楽規律」「音楽認識」「音楽情意」「音楽意味」の７因子を析出し、教師は独自の枠組みから、「カリキュラム経験」を構成している可能性を論じた。

第３章では、第２章において明らかにした教師の経験内容構造の枠組みが、どのような文脈から構成されるのか、自由記述の計量テキスト分析を通して明らかにした。本分析から、教師の教科授業の「中心性」は「関わる」であり、「行事」との強い共起関係が明らかにされた。そして、教師のパースペクティヴを構成する文脈として、「集団的協同性」「学校音楽拡張性」「音楽専門性」の３つを析出した。

第４章では、教師の「語り」と分析を通して、第２章において明らかにした教師の経験内容構造の傾向的特質、第３章で析出した教師の解釈枠組みを構成する文脈的構造を検証するとともに、教師の「カリキュラム経験」を構成する過程とメカニズムについて検討した。教師の「語り」の再組織化を通して、教師は教科授業を、行事や部活動などの教科外活動との構造的連関において、さらに自身のキャリアにいたる多様な文脈の交錯の中で意味づけていることを論じた。そして、教師のカリキュラムの「意味の再構成」過程に、複線的に作用する文脈を、「教師の学習経験」として整理し、第１章の作業仮説モデルに新たに位置付けた。

「第２部」（第５章・第６章・第７章）では、（３）の課題、すなわち、第１章の枠組みを用いて、「カリキュラムによる適応過程」から、主に中学校生徒の「学校音楽のカリキュラム経験」を検討した。

第５章では、質問紙調査の統計的分析を通して、児童生徒の「カリキュラム経験」の内容構造とその傾向的特質を明らかにした。ここでは、児童の経験内容構造として、「音楽協同」「音楽意欲」「音楽的思考」の３因子を、生徒のそれとして、「音楽協同」「音楽認識」「音楽意欲」「音楽規律」「音楽生活」「音楽情意」の６因子を確認することができた。本分析から児童生徒は、独自の枠組みからカリキュラムを経験している可能性を論じた。

第６章では、第５章において明らかにした児童生徒の経験内容構造が、どのような文脈から構成されるのか、自由記述の分析から明らかにした。計量テキスト分析から、生徒の「学校音楽」についての「中心性」が「合唱コンクール」にあることを確認し、児童生徒が学校音楽カリキュラムを意味づける文脈として、「集団的協同性」「音楽拡張性」「音楽専門性」「音楽情意」の４つを析出した。

第７章では、「元」児童生徒の「語り」と分析を通して、第５章において明らかにした傾向的特質、第６章で析出した児童生徒の解釈枠組みを構成する文脈的構造を検証するとともに、生徒の「カリキュラム経験」を構成する過程とメカニズムについて検討した。音楽に進路展望をもつ「語り」と、もたない「語り」の再組織化を通して、学校音楽カリキ

ュラムは、学校外で蓄積された音楽経験と学校の音楽経験のハイブリッドな潜在的構造から意味づけされ、経験されることを論じた。そして生徒のカリキュラムの「意味の再構成」過程に作用し、カリキュラムを多様に意味づける複線的文脈を、「生徒の学習経験」として整理し、第１章の作業仮説モデルに位置づけた。さらに学校音楽カリキュラムが人や場、空間や時間などに「開かれた」循環的構造をもつとき、生徒たちに積極的な経験の意味が拓かれるという新たな知見を得た。

終章では、（４）の課題を追究し、本論文の研究成果を要約するとともに、結論として、第一に、学校音楽カリキュラムの実証的な理論モデルを提出した。そして「学校音楽のカリキュラム経験」を把握する補強理論として、スモール(Small,C.)の「ミュージッキング」（musiking）の概念を援用し、「スクール・ミュージッキング」（school musiking）という概念を新たに提案した。第二に、学校音楽教育を「文化学習」として捉え、「カリキュラム経験」を構成する「学校音楽文化」の枠組みを示した。本研究では、以上を「学校音楽文化理論」と呼んで結論として提案した。本研究の理論モデルのポイントは、従来の単一的、単線的なスタティックな学校音楽カリキュラム研究に対し、学校音楽を「文化」の観点から捉えることで、それを担う人々の多様な関係性の文脈から経験されるカリキュラム観を対置し、教育過程の「知」の伝達過程を複線的に捉えなおそうとした点にある。本研究の成果は、従来スタティックに捉えられてきた学校音楽カリキュラムを、学校の教師や生徒によって変革可能なものとして、そして新たな価値と効果を生み出す可能性をもつダイナミックな構造をもつものとして捉えることを可能にする。